

続・ 珈琲の思い出 30

鈴木優子

「私、うちのおはなし会で初めて和樹さんをお見かけしたとき、ああ、なんてかつこいい人なんだろう？こんなにかつこいい人見たことがない！つてすごく思ってたんです。

それから・・・、ねえ、こんなこと言っても変な人だと思わないでくださいね。和樹さんが走っておはなし会の会場に現れたとき、『ああ、やつと見つけた、私の運命の人だ！私を迎えに来てくれたんだ！』つてすごく嬉しかったんです。それ以来、私、和樹さんのことがずつとずつと大好きなんです。

ああ、こんなことを言つて本当にごめんなさい！
迷惑ですよね・・・。」

タクシー乗り場まであと6メートル。

優子が横目でそつと和樹をうかがうと、

和樹が顔を真っ赤にして、うつすらと涙ぐんでいる。

「ああ、優子さん、どうしてそれをもつと早く言つてくれなかったの！」

「えっ・・・？」

つかの間向き合った二人・・・と、

和樹がすつと優子を抱き寄せる、

「うーん・・・」

唸ったかと思うと、優子の額に唇を寄せて、たつぷり時間をかけて、熱いキスを行った。

(続く)